

ひがしの

8月号 東野小学校報 No. 5

命 校長 青山龍三

夏休みに入ります。私たちの願い（「規則正しく生活してほしい」「勉強をちゃんとしてほしい」「健康に過ごしてほしい」等）など頭から飛んでいってしまい、子どもたちは心も体もウキウキして開放され、楽しい日々の訪れを待っていることと思います。

私は、いつもこの時期になると心配な毎を送ります。新聞やテレビで連日のように事故の悲しいニュースが流されるようになるからです。しかし、何としても一番に命だけは守りたいものです。

一方で、夏は生命があふれ、小さな虫の命から地球そのものの命まで、体で感じる季節です。



1学期、1年生は多くの花を種から育てました。そして、東野幼稚園の子たちに、種をまくところや育てるところから、その花の利用方法などを教えてあげました。この活動の中で、子どもたちは、花の命を、心で直接感じる経験をしたと思います。花を切るときや、葉を取るときに『ごめんね』と花に言っていた子がいたと聞きました。命の大切さは、本や大人から教えてもらう場合もあるし、体験から直接自分で感じ取る場合もあると思いました。

命の大切さを知った子・感じた子は、きっと休み中もいろいろなところに命を見つけ、大切にするとします。もちろん自分自身の命も大切にできる子に育つと思います。

火花が	さわたら	ほんの	はたらいて	きらきらと	いのちだけ	からだは	あんまり	アリの	アリ
とびちり	ら	そつと	いるよう	と	が	ないよう	小さい	は	まど・
そうに		でも	に見える		はだか	に見える	ので		みちお
…					で				

私も子どもの頃、アリの行列や働く様子を、時間を忘れて見入ったことを覚えています。1匹のアリが自分の何倍もある食物をせつせと巣穴に運んでいる姿は、あんなに小さいのに、力強さを感じ、立派に見えました。その小さな裸の命がエネルギーに満ち溢れ、手で触れると、パチッときそうに感じるというこの詩の作者は、さすがに詩人であると思います。

木 田村隆一

木は驚^{おど}っているから好きだ
 木は歩いたり走ったりしないから好きだ
 木は愛とか正義とかわめかないから好きだ
 ほんとうにそうか
 ほんとうにそうなのか
 見る人が見たら
 木は囁^{ささ}いているのだ ゆったりと静かな声で

木は歩いているのだ 空にむかって
 木は稲妻のごとく走っているのだ 地の下へ
 木はたしかにわめかないが
 木は
 愛そのものだ
 それでなかったら小鳥が飛んできて
 枝にとまるはずがない
 正義そのものだ
 それでなかったら地下水を根から吸いあげて
 空にかえすはずがない

若木^{わかぎ}
 老樹^{らうじゆ}
 ひとつとして同じ木がない
 ひとつとして同じ星の光りの中で
 目ざめている木はない

木
 ぼくはきみのことが大好きだ



きらきらした命を思いっきり輝かせた子どもたちと9月1日にまた会いたいと思っています。